

日本語授業における文化的要素の取り入れ

The Integration of Cultural Elements into Japanese Language Teaching

郭 穎俠
香港中文大学 專業進修学院

要旨

日本語教育では、言葉の含む意味を正しく理解した上で運用できる日本語能力を養成する場合、語彙や文法などの言語形式を教えると同時に、日本文化的な要素をできるだけ多く取り入れる必要があると思われる。ここでは日本語学習者の日本文化的な知識の不足に起因すると思われる誤用を分析し、それを解決、或いは事前に防ぐために、「日本事情」や「日本文化」などの授業以外の一般的な日本語授業に日本文化的な要素を取り入れる必要性と、その取り入れ方について考察し、提案する。

キーワード：

文化的要素、取り入れ、理解、運用

日本語授業における文化的要素の取り入れ

郭 穎俠

香港中文大学 專業進修学院

1. はじめに

香港の日本語学習者の誤用の中には、語彙も文法も間違っていないが、どこか不自然であるものがよく見られる。筆者はそれらの多くは文化的な知識の欠如から現れているものだと思い、一般的な日本語授業においても文化的な要素をできるだけ多く取り入れるべきだと考える¹。

森山 (2004)、楊・曹 (2005)、大川 (2006) は文化的要素を取り入れる重要性を唱え、日本語学習と日本文化の学習は密接に結びついているとしている。また、細川 (1997) は文化の問題は場面やコンテキストの理解にあわせて、第二言語習得の当初から考えられなければならないと考えている。筆者も初級の段階から日本の文化的な知識を日本語学習に役立つものとして日本語授業でできるだけ多く取り入れるように心がけている。

しかし、香港では、意識的あるいは無意識的に日本文化的な要素を取り入れている教師もいるが、日本文化の授業でなければそれには触れない教師も見られる。また、香港における日本文化的な要素の取り入れ方に関する研究は筆者の知るところではまだない。香港では一般的な日本語授業の中にどのように文化的要素を取り入れるかについて考察し、いくつかの実践例を提案する。

2. 香港の日本語学習者に見られる誤用

ここでまず日本語学習者の日本語使用例を見てみよう。語彙も文法も間違っていないが、どこか不自然で、特別な文脈でないと使わないものである。これは、学習者が日本語の授業で語彙や文法を習い、その意味や用法を理解している場合でも、文化的

1 ここで言う一般的な日本語授業は、「日本文化」や「日本社会文化」のような文化を教える授業ではなく、日本語の語彙・文法を扱う授業や会話、読解、聴解など文化に焦点を当てない授業のことである。なお、ここでいう文化的な要素の取り入れは、学習者が言葉をよりよく理解・運用するために、教師が関連する文化的なものを紹介し、知ってもらうことである。この取り入れは文化を習得させることを目指すものではなく、その文化的なものが全部日本特有のもので、日本人が全部そう考えているということを必ずしも意味していない。

な知識が不足すると、日本語の運用と理解において間違いを起こしてしまう例だと考えられる。筆者が教える香港の日本語学習者の誤用には以下のようなものがあった。

- 例1：「マリアさんは静かなところに住みたいです。」と書く
例2：「(かばんがいっぱいで) もう入れられません。」と言う
例3：「先生、今日は大変上手に教えましたね。」と先生を褒める
例4：作文を訂正してもらって、「郭先生が作文を直しました」と言う
例5：次のような挨拶が理解できない
A：「お出かけですか。」
B：「ええ、ちょっとそこまで」

2つの例は筆者の学生によるものではないが、筆者がモンコックのあるイタリア料理のレストランで体験した学習者の日本語の誤用である。

- 例6 ウェイトレス：「お客さん、おわりですか。」
例7 ウェイトレス：「何を飲みたいですか。」

例1は学習者が日本語の人称によって使う言葉が違うということについての知識が足りないことによるものである。例2は日本語では自動詞的な表現を好むのが知らない為だともわれる。例3は日本語で重要視する上下関係、上の人を評価してはいけない、例4は感謝の気持ち、例5は曖昧な言い方やぼかす表現、例6と例7は日本の察しや配慮の文化に関する知識が不足していることに起因すると考えられる。

このほかにも、香港の学習者の中で日本人が毎日刺身を食べていると思っている人が数多くいるようだ。日本のアニメのキャラクターのような言葉遣いをする学習者もよく見られる。何(2009)によると、実際のコミュニケーションでは、次のような会話をしてしまうケースもある。これは日本語では基本的に相手と協調しながら会話を進めるということを知らないため、文法的に間違いはないが、不本意で相手にあまりよくない感触を与えてしまう例である。

- 例8：学習者：「コーヒーがすき？」
日本人：「すき」
学習者：「私はコーヒーが嫌いだ」

これらのおびただしい数の細かい知識は全部一個ずつ文法規則や文型として教え込むのは不可能で、学習者も覚えきれない。しかし、日本文化的な要素として一般的な日本語授業で語彙や文法の学習と関連付けて取り入れれば、学習者の注意を促し、正しい運用につながると思われる。例えば、学習者の知らない事象や考え方を絵や映像などで紹介すれば、理解しやすくなるだけでなく、単調な文法や読解の授業が面白くなり、学習者の注意を引くことができる。また、日本語より日本文化に興味を持つ学習者のニーズにも合っているので、学習者も達成感を覚え、モチベーションが高くなるだろう。ゆえに、学習者の前述のような間違いをするのを防ぐためには、語彙や文法の学習と同時に、知っておくべき関連する文化的要素を授業にできるだけ多く取り入れる必要があるのではないだろうか。

3. 文化的な要素とは

本節では日本語教育における文化的な要素とは何かを定義する。中田（2006）によれば、第二言語教育の中の文化は昔から主に文学との関連において捉えてきたが、60年代ごろに L2 母語話者の生活様式もその対象に加えられ、70年代から80年代にかけて社会としての文化、文化としての社会が重要性を増してきた。佐々木（2002）は「文化」は伝統文化ばかりではなく、言語教育では「社会・文化」とも呼ぶべきものだとしうえて、日本語・日本事情の分野で重視されている文化概念を整理し、図示した。それを参考に、香港の日本語授業に文化的な要素として取り入れるべき内容を次の4つに分類した（表1参照）。

表1 文化的な要素の種類（佐々木，2002，pp219-230 参照）

伝統文化に属するもの	茶道、華道、能、歌舞伎など日本の伝統文化に関する内容
精神文化に属するもの	主に日本人の感情や思考パターンなどに関する内容
大衆文化に属するもの	日本の漫画、アニメ、ドラマ、カラオケ、ゲームなどに関する内容
一般教養・常識・時事に属するもの	日本人の生活習慣、慣例、年中行事などに関する内容 例えば、冠婚葬祭の知識や靴の脱ぎ方、ゴミの出し方など

香港の学習者はこうした広義の文化に非常に興味をもっていることがすでに指摘されている。木山（2011）によると、2010年香港学習者背景調査で学習目的に日本語学習者は90%が「日本の文化（アニメ、漫画、ポップカルチャー）を知りたい」、74%が「日本文化（文化や歴史）を知りたい」を選択している。また、筆者が2011年9月に香港中文大学専業進修学院で開講されている「(英・中・日) 三か国語ビジネスコミュニケーション (Trilingual Studies)」という「高級文憑課程 (Higher Diploma)」プログラムの2年生全員を対象にアンケート調査を行ったが、「日本文化的要素に興味があるか」という質問に「ある」と答えたのが100%だった。

また、筆者が2012年3月に日本国際交流基金の短期研修に参加している間に金泰姫との共同調査を行い、違う国籍の非母語話者日本語教師57人にアンケートを行ったところ、「日本人との会話で文化や言語行動の違いを感じたことがあるか」という質問に88%が「ある」、「日本語学習者に日本文化・日本事情などの内容を日本語の授業で教える必要があるか」という質問に100%が「とても必要」か「すこし必要」と答えていることがわかった。

4. 言語教育における文化的な要素取り入れの流れ

文化的な要素を日本語教育に取り入れる必要性は言語教育の流れの中で捉えることができる。言葉を学ぶことは文化を学ぶことだと古くから言われているように、言葉と文化は切っても切り離せない関係にある。近年、世界で言語教育の中心となっている教育観は、コミュニケーション・ランゲージ・ティーチングであり、文化に適応する、言語学習の一環として文化に参加する必要性が高くなっている。教育内容を重視し、言語知識の伝授が中心であった言語教育は、教育方法を重視し、コミュニケーション能力の育成が中心となってきている。

言語教育の目標として明確に文化に関する理解を掲げた試みはアメリカの全米外国語教育協議会 (ACTFL) が策定した「外国語学習基準」である。その中で、文化に関する理解は目標の五つの柱のうちの一つになっている。大川 (2006) ではこれら5つのCにより、文化的知識に裏づけされた言語知識の運用能力を言語教育目標にしていることがわかるとした。

次は香港の日本語学習者が目標の一つとしている「日本語能力試験」の認定基準から日本語教育における文化的な要素の知識の重要性を見てみる。2010年から日本語能力試験が新しくなり、言語知識（語彙や文法）をどの程度把握しているのかではなく、日本語をどの程度理解できるかという能力を重視するようになってきている。

日本語を理解する能力は日本国際交流基金の『JF 日本語教育スタンダード 2010』によると、語彙の知識、文法規則、発音、文字、表記などに関する「言語構造的な能力」、相手との関係や場面に応じて適切に言語を使う「社会言語能力」、言葉を組み立てたり、役割や目的を理解する「語用能力」の3つで構成されるとしている。この中で、「社会言語能力」と「語用能力」は日本社会文化的な知識が必要不可欠である。

語用論 (pragmatics) の立場から見ると、文化的な要素の取り入れが特に必要になってくる。語彙や文法の知識の学習だけでは日本語の解読的意味、つまり外国語に翻訳可能な表面的な意味は理解できたとしても、文化的な知識がなければ、言葉の奥にある意味が読み取れない。これはいわゆる言葉以外の意味というもので、文脈に照らして推論を行うことによって初めて理解に到達する意味や、一般的な見方を前提として、推論のみによって得られる解釈などを含んでいる。

また、日本の文化は「高コンテクスト (high context)」文化といわれ、人間関係が密接で、1つの情報が人々の間に広く伝わり、言語で明確に表現していなくても、お互いに理解できるという特徴がある (今井 2001)。そのため、日本語非母語話者にとっては理解しにくい部分が多くある。この日本文化の特徴から見ても、文化的な要素の知識が必要とされることが分かる。

5. どのように取り入れるか

これまで言語教育における文化的な要素を取り入れる流れとその必要性について述べてきたが、本節では実際に授業に取り入れる際に、どうすればいいのか考えてみたい。

まず、教師が文化的要素の授業への取り入れを常に意識しなければならない。香港の日本語学習者の大部分を占める学習者はパートタイムのプログラムで勉強し、日本文化や社会文化のような授業を受講している人が少ない。そのため、一般的な日本語の授業では、そのコースの名称にかかわらず、時間的に余裕がある限り、授業内容に必要な文化的な要素を随時取り入れるべきである。

具体的には、授業に出てくる語彙などに関連する知識に一言でも触れる、詳細に説明する、語源を遡る、学習者の母語と比較する、学習者と討論するなどの方法がある。

次に、具体的な方法として、語彙との関連、文法との関連、ゲームとして取り入れる場合に分けて、香港の日本語授業における文化的要素の取り入れ方を提案する。

5.1 語彙との関連で取り入れる場合

香港の学習者は漢字がわかるため、語彙は難しくないと言われ、香港で働く日本語教師は思いがちである。しかし、漢字がわかることで、逆に細かいところで学習者は間違いを起こしやすくなる。同じ漢字の言葉を見ても、日本人のイメージするものと香港の学習者がイメージするものとは異なるものもある。名詞を例にして、日本語の授業中に出てくる語彙に関連する文化的な要素をどのように取り入れられるかを見てみよう。

例えば、授業で「湯」という語彙を紹介するとする。最初は学生にこの漢字を見て何を思い浮かべるかを考えてもらう。その際、香港の学習者は「スープ」をイメージするはずである。そこで、日本人の「湯」に対するイメージ（「お風呂」や「温泉」といったもの）を紹介し、学習者に語彙におけるギャップを考えてもらう。このことは非常に重要で、効果的でもある。絵や写真で紹介すれば、詳しく説明する必要がなく、時間もかからない。このように印象を深く残すようにすれば、学習者が「男湯」や「女湯」のような暖簾を見た時にびっくりしたり、「フランス料理を食べる時に先に湯を飲む」のような誤用をしたりすることを事前に防ぐことができる。

5.2 文法との関連で取り入れる場合

日本語の授業で文法を教える場合、単に規則を説明して学習者に暗記させるというやり方では不十分である。日本語を理解する能力や運用する能力を身に付けさせるためには、その背後にある文化的な要素と一緒に提示することが必要不可欠である。この提示がなければ、この文法をなぜ使用するのか、またしないのかは分からないだろう。

例えば、敬語を勉強する時に、日本の社会が縦社会であることを説明しておかないと、学習者がなぜこのような面倒な言い方をしなければならないのか根本的に理解できないし、使おうともしない。敬語以外にも次のような関係付けで、文法知識と同時に文化的な要素を導入し、文法の理解を深めることも期待できるであろう。ただし、一回説明しただけで、学習者が日本語を運用する時にいつも気を付けることができると限らないので、初級段階から何回にも分けて同じ文化的な要素を繰り返し説明したほうが効果的ではないかと考えられる。

表2は初級段階で扱う一部の文法学習項目と文化的要素の関連性を示したものである。これは、どのような文化的な要素を学習者に説明する必要があるか、どの時点で学習者に説明するかなどについて疑問がある教師の1つの参考材料としてまとめたも

のである。前述のように、規則の背後にある文化的な要素を何回かに分けて、関連する項目を授業で扱うたびに提示し、説明する必要がある。それを繰り返すことによって学習者の注意を向けさせるのが目的である。

表2 文法学習項目と文化的要素の関連性

文化の文法	文化的背景	文法学習項目
1 共話の文法 話し手と聞き手が共に話 を作っていくための文法 (水谷 (1999) を参照)	共通点を探し、共感 する文化	<ul style="list-style-type: none"> ● 一部の助詞 (ね、よ等) ● 相づちの表現 ● 文脈指示のア系 ◇ 受け答えの「はい」「ええ」を使う ◇ 会話のはじめに天気など共通の話題を する
2 察しの文法 相手のことを察し、それ にあわせて話すための文 法	相手の意図を察しあ うというハイテクス ト文化	<ul style="list-style-type: none"> ● 文末を省略する ● 相手の状況察して使う「～んです」 ◇ 相手の気持ちを察して申し出する ◇ 相手の気持ちを察して誘う ◇ 相手に傷つけないように遠まわしに話 す
3 配慮の文法 聞き手の時間的な余裕や 選択の余裕に配慮する文 法	背景にあるのは他者 への配慮を重んじる 文化	<ul style="list-style-type: none"> ● 「でも」「ほど」などのぼかす表現 ● 相手のためを考えて使う「～ください い」 ◇ 相手のことを追い詰める表現を避ける ◇ 前置きで相手に心の準備時間を与える
4 感謝の文法 相手との関係を緊密に し、心地よくするための 文法	背景にあるのは常に 感謝の言葉を口にす る文化	<ul style="list-style-type: none"> ● 授受表現 ● 「～のおかげで」 ◇ 家族にも感謝のことばを使う ◇ 小さいことでも感謝を述べる ◇ 以前のことを改めて感謝する
5 迷惑の文法 迷惑を常に意識するた めの文法	極力人に迷惑をかけ ないように心がける 文化	<ul style="list-style-type: none"> ● 「迷惑をかける」 ● 「迷惑だ」「迷惑になる」 ● 迷惑の受身 ◇ 「すみません」の多用

文化の文法	文化的背景	文法学習項目
6 一人称潜在の文法 「私」を口にしない文法	自己主張を抑える文化	<ul style="list-style-type: none"> ● 感情形容詞 ● 「たい」、「つもり」、「思う」など ● 受身の主語 ● 自分を基準にする「来る」、「行く」 ◇ 自分との関係によって敬語を選択する
7 流れ重視の文法 一連の流れで話を展開するための文法	起承転結を意識する文化	<ul style="list-style-type: none"> ● 文脈指示のコ系、ソ系指示詞 ● 前のことと関係付ける「～んです」 ● 助詞、陳述副詞の前後呼応 ● 文の主語一致 ◇ 接続詞、接続助詞を使う
8 終り重視の文法 SOV 型の文法	綺麗な最後を飾る桜と武士道の文化	<ul style="list-style-type: none"> ● 文末に来る述語、肯定否定、テンス、アスペクト、ムードの表現 ● 後接する助詞、助動詞 ● 基本的に談話や文章の最後でまとめる
9 自然重視の文法 「なる」的文法	自然を大事にする文化	<ul style="list-style-type: none"> ● 自他動詞の区別 ● 可能形、受身形などの自動詞化 ● 「ように／ために」の区別 ● 使役受身 ◇ 自動詞の優先的使用 ◇ 「～と思われる」「～と言われている」「～ようになる」「～である」と表現する
10 距離重視の文法 自分との距離で決める文法	上と下、内と外を区別し、距離をおく文化	<ul style="list-style-type: none"> ● 場面指示の「こそあど」 ● 距離によって区別する呼び方 ● 敬語 ◇ 受身の主語選択 ◇ 他人を評価する表現を避ける ◇ 第三者同士の「～てくれる／～てあげる」

● 言語表現

◇ 言語行動

学習者が初級から授業で文法や表現を習うと同時にその背景にある文化に馴染み、理解を深めることにより、学習した内容をより強く印象づけ、より早く自動化して正確に運用できるようになることと、関連項目を連想させ、予備知識を活用させ、授業以外での気づきを促すことが目標である。これは網羅的なものではなく、具体的な名称や分類がさらに整理する必要があるが、初級を教える香港の日本語教師が簡単に使えるように作成したものである。「文化の文法」という欄は先行研究を参考につけた名称で、学習者に説明する必要はない。「文化的背景」に関連することを「文法学習項目」を扱うたびに紹介し、学習者に気づきを促す。「文法学習項目」には言語表現のほかに言語行動に分類できるものもある。次は1番目の「共話の文法」を例に具体的な教え方を示す。

「共話の文法」としてまとめたのは「共通点を探し、共感する」という文化を背景とする文法項目である。やり方は、まず、確認を表す「ね」を導入する時に、相手の言う大事なことを繰り返して確認するのが一般的な話し方で、相手と一緒に会話を作っていくのが日本語だと説明をしておく。時間があれば、日本の「和」の精神や集団主義など関連がありそうなものにも触れる。次に、相づちの表現を学習する時に、なぜ相づちが重要なのかを説明する時に、もう一度日本に「共通点を探し、共感する文化」があり、それが言葉として現れてくるものだと説明する。そして、文脈指示のア系を導入する時に、また繰り返して説明し、確認を表す「ね」や相づちの表現に触れる。また、「はい」、「ええ」のような感動詞を学習するときも、日本には「共通点を探し、共感する文化」があるから、普通は「いいえ」をストレートに使わないと説明している。会話や手紙、メールの初めに出てくる天気の話もそのためだと説明する。このように5回ぐらい説明すれば、学習者がこの文化に気付くようになり、例8のような人を不愉快にさせる可能性のある会話をしてしまうことも減少するであろう。

表2の全部の項目の説明は別稿に譲るが、「配慮の文法」は例5、例6のような誤用、「感謝の文法」は例4のような誤用、「一人称潜在の文法」は例1のような誤用、「自然重視の文法」は例2のような誤用、「距離重視の文法」は例3のような誤用を防ぐ効果が期待できると思われる。

5.3 ゲームとして取り入れる場合

一般の日本語授業に必要な文化的な要素を取り入れる方法としてもう一つ提案したい。日本でよく耳にする「〇〇といえば何？」というゲームである。授業の導入部分に使うか授業で時間的に余裕があるときにアクティビティなどで教室活動として行う。

授業の内容と直接関係があるものでも直接的な関係ないものでもかまわない。例えば、「記念日といえば何?」、「毎日することといえば何?」、「秋といえば何?」などいろいろなテーマを選ぶことができるが、その答えで文化の差が大きく出るものとあまり差がないものがある。それで学習者は日本人が何をどう考えているかゲームをしているうちにだんだん分かるようになるし、自分自身の答えとの比較を通して、注意すべき部分を身につけることができる。

文化的な要素の具体的な取り入れ方を見てきたが、その上でさらに、学習者の自律学習を促し、日本文化的な要素への注意を喚起し、授業以外でも多様な方法で積極的に取り入れる必要がある。学習者が気付けば、趣味で普段よく接触しているドラマや漫画など趣味からより多く吸収できるであろう。その段階になるまでは教師主導の活動が必要ではないかと思われる。

6. まとめ

学習者が言葉の含む意味を正しく理解した上で日本語で円滑にコミュニケーションをとることができるようになるためには、日本の文化的な知識を身につける必要がある。日本社会文化や日本事情などの科目を設定することも学習者の自律学習を促すこともいい方法ではあるが、香港の日本語教育の現状では、一般的な日本語の授業では語彙や文法などの言語形式を教えると同時に、日本文化的な要素をできるだけ多く取り入れてはじめて、そのような日本語能力の養成が可能になるだろう。

本稿では、香港における日本語学習者の日本文化的な知識の不足による誤用を紹介し、一般的な授業への取入れの必要性を検討した。また、日本文化的な要素をどのように一般の授業に取り入れたらよいかについて、具体的な方法を提案した。これらの方法はどのような成果があるのかについては、さらに調査と研究を行う必要があるが、それを今後の課題としたい。

参考文献

- 今井邦彦（2001）『語用論への招待』大修館書店
- 大川英明（2006）「映画における文化要素と日本語教育」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第16号
- 何志明（2009）「香港滞在中の日本人留学生及び日本留学歴を持つ香港人大学生のコミュニケーションに於ける問題点」萬美保・村上尚文編『グローバル化社会の日本語教育と日本文化—日本語教育スタンダードと多文化共生リテラシー』ひつじ書房
- 佐々木倫子（2002）「日本語教育で重視される文化概念」細川秀雄 編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社
- 田中春美・田中幸子（1996）『社会言語学への招待—社会・文化・コミュニケーション』ミネルヴァ書房
- NAFL日本語教師養成プログラム（2008）『21 異文化間教育とコミュニケーション』アルク
- 日本国際交流基金（2007）『日本語教授法シリーズ 11 日本事情・日本文化を教える』ひつじ書房
- 日本国際交流基金（2010）『日本語教授法シリーズ4 文法を教える』ひつじ書房
- 日本国際交流基金・日本国際教育支援協会「新しい日本語能力試験」公式サイト
<http://jlpt.jp/reference/materials.html>
- 中田清一・秋元美晴編集（2006）『ことばと文化をめぐって—外から見た日本語発見記』ひつじ書房
- 日本国際交流基金『J F 日本語教育スタンダード2010』
- 細川秀雄（1997）「言語習得における〈文化〉の意味について」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』第9号
- 香港日本語教育研究会・木山登茂子代表（2011）「2010年香港日本語学習者背景調査報告」『日本学刊』第14号
- 水谷信子（1999）『心を伝える日本語講座』研究社
- 森山新（2004）「日本語教育における文化の重要性」韓国中等教育日本語教師訪日団講演会 日韓文化交流協会 招待講演
- 楊曉鐘・曹珺紅（2005）「曖昧な日本語を再認識—日本語教育の立場から」『福井大学教育地域科学部紀要第I部人文科学（国語学・国文学・中国学編）第56号